



▲4mを超える階高の2階



▲敷地内にある旧豊川電話中継所倉庫(現在は東半分のみ現存)



文化財
を
訪ねて
第6回

国登録有形文化財
トヨテック本社社屋・倉庫
(旧豊川電話中継所本屋・倉庫)



トヨテック本社社屋・倉庫(旧豊川電話中継所本屋・倉庫)は、本屋は『造形の規範となっているもの』、倉庫は『国土の歴史的景観に寄与しているもの』として、平成19年に国登録有形文化財(建造物)に登録されました。

岡崎信用金庫資料館は竣工百周年を迎えました。歴史的価値のある文化財を未来に託すため「文化財を訪ねて」シリーズとして、愛知県内の登録有形文化財を紹介してまいります。第6回はトヨテック本社社屋・倉庫(旧豊川電話中継所)です。

旧豊川電話中継所本屋・倉庫は、愛知県の東三河に位置する豊川市にある(株)トヨテック本社敷地内に建っています。

国内で最初の一般公衆通話の取り扱いはいは明治22年(1889)からですが、この頃は架空に設置された裸線が用いられたことから通話距離に限界がありました。これを解決し長距離通話を可能にしたのが装荷ケーブルと真空管中継器でした。昭和3年(1928)、東京―神戸間に装荷長距離ケーブルを使用した市外通話が開始しましたが、この時、真空管中継器を用いて音声を増幅する施設として電話中継所が9カ所建設されました。旧豊川電話中継所はそのうちの1つです。愛知県内に現存する電話中継所はここだけになっており、装荷ケーブルに関する希少な産業遺産です。

(※1) 通信省は、かつて日本に存在した郵便や通信を管轄する中央官庁。現在の総務省、日本郵政、及びNTTは、通信省の後身に相当する。

(※2) 戦前の通信省において郵便・電話・電気/事業の局舎等、施設を通信省官制課の官僚(技師集団)らによって設計された建築物。合理主義の建築という通信建築は堅実で質高い標準設計・建築を数多く生み出し、個性溢れる建築家を多く擁していた。

現存する数少ない通信省建築物
旧豊川電話中継所本屋は、鉄筋コンクリート造2階建てです。北側2階の増築部分以外は建設当時の外観を留めています。中継所時代の延床面積は612・45平方メートル。中継所時代、1階は電力室、電池室や宿直室等として使用され、2階には中継器が設置された機械室等が配されています。

た。当時の中継器は高さが約3メートルあったため、階高は4メートルを超えるほどに高くなっています。内部は装飾のない仕上げとなっています。現在は事務室等に改装されています。外観は、屋上の水平の庇、縦長の窓、縦型をつけた柱と間柱で通信建築の特徴が見られます。特に、外側に出された柱と間柱は屋根庇の手前で止められ、両者の間に隙間を造つ

ています。また、柱の端部を階段状にするなど、当時の通信省の意匠が見られます。建物の規模、各室の配置や建築意匠については、最初に建設された亀山中継所などと類似しており、電話中継所建設にあたり標準仕様があったと考えられます。

希少な昭和初期の
コンクリート造建築

古い鉄筋コンクリート造の事務所ビルは大正2年(1913)の三井物産横浜ビル1号館がありますが、普及したのは大正9年(1920)頃からです。昭和初期のコンクリート造建築物は愛知県でも希少となっています。昭和初期の通信省による標準的な中継所建築として、数少ない建築物の一つである旧豊川電話中継所は、昭和27年(1952)に中継所としての役目を終えましたが、昭和60年(1985)に(株)トヨテックが豊川市から買い受け、修復保存し本社屋として現在も使用しています。

株式会社トヨテック

トヨテックは、オプト(光学)、メカ(精密機械)、エレクトロニクス(電子技術)の3つの専門技術を柱とし、お客様のニーズを設計開発から製品化する、オプトメカトロニクスの総合メーカーです。

〒442-0024
愛知県豊川市西豊町二丁目35番地
0533-85-1110
公開時間：10時～16時
休業日：土・日曜日
見学無料
www.toyotec.com

